

追 悼 文

故長戸路千秋先生を偲ぶ

理事 鈴木 登喜雄

長戸路千秋先生が、敬愛学園の前身である関東中学校に教諭として就任されたのは、昭和十二年のことである。そのとき以来、本年五月八日、満七十四歳をもって逝去されるまで実に五十余年間、学園の教育と経営に文字通り全身全霊をささげて精励されたのである。はじめは、学園の創立者でありまた義父であられた長戸路政司先生の傍らにあって、よくこれを助け、戦前戦後の困難な時期をのりこえて、敬愛学園発展の歴史にきわめて大きな功績を残された。ことに創立者亡きあと、理事長、学長として全学を統率し、本学園の学風の発展と経営の安定に顕著な業績をあげ、守成の功を全うされたのである。

先生はまた、千葉市教育委員会委員長、関東及び全国の市町村教委連絡協議会会長、千葉県私学審議会委員、私学団体連合会役員等の公職を歴任され、それぞれ立派な業績を残されている。このような公私にわたる教育への長年の貢献によって、逝去に当たり勲三等旭日中綬章を授与されたのである。

先生は、最期の病床にあって、哲学の道にはいったのも教育の道にはいったのも、自分にとっては必然の道であったと述懐されている。校務のかたわら絶やまず研鑽をつづけ、その哲学をもって建学精神「敬天愛人」の周到的な基礎づけに努力され、つよい使命感をもって学生たちに懇々と説いてやまなかったのである。この機会に、先生の人柄や思想について感じるところを二、三申し述べて追悼の意を表したいと思う。

先生の著述を見ると、至るところに「忠実に」、「謙虚に」という言葉が使われている。とくに謙虚にという言葉は、単に文章上の修飾語としてではなく、先生の人柄そのもの、さらには思想そのものから流出した言葉であったといってもよからう。「天地宇宙はわれわれ人間の生みの親であり、人間はその生みの子である。それゆえ天地宇宙を支配する道理を謙虚に追求し、それに随順して生きる以外に人間の生きる道はない」というのが、先生の思想の基本をなしている。人間は自然によってはぐくみ「生かされ」ているのであり、自然に背反して生きることは絶対に許されないのだという「基本的、根源的な自覚」にもとづく謙虚さこそ、自然の中で生きていく人間にとってはもっとも大切な生活態度であり、また、天地自然の真実を探究しようとするものが厳しく守らなければならない研究態度であることを、繰り返えし強調されている。

したがって先生は、謙虚さの反対物である不遜、傲慢、独断を極端に忌みきらわれた。まず第一に、近代人とくに現代人が、不遜にも、自然を人間の利便のための単なる手段、征服の対象としてしか見ておらず、あらゆる資源を濫費し、大気を汚染し、生体系を破滅に陥れるなど、競って地上を荒廃させようとしているが、これはまさに、己れのいのちを喰いつぶす愚行であり、狂気の沙汰であると非難している。第二には、学問の世界で分業化、専門化がすすんだ結果、とかく、一面的、部分的観察にすぎないものをもって、全面的、全体的、絶対的真理であると主張する強引さや傲慢さが横行し、今や深刻な思想的、学問的無政府状態が生じている。第三には、個人あるいは特定の集団がエゴイズムに駆られ、争って自分に有利なことだけを取りいれ、頑固にそれを正当であると強弁して、相互の反撥とはげしい憎しみを増幅している。これらはすべて、自然の恩恵を忘れ、学問研究に欠かせない謙虚さや総合的な立場を軽視し、自他共存の道を忘却している人間の不遜さに基因するものであると難詰されている。

長戸路先生の謙虚さという問題にかかわるひとつの挿話として、敬愛短

大の一二三教授の思い出をここに引用させていただく。「ある時、先生に私が『西南の役の際に、西郷さんが熊本から鹿児島まで敗走していったルートを、学生と一緒に歩いていってみたいと思います』と話しますと、先生は『私は個人崇拜の立場はとりません』ときっぱりおっしゃったので、それ以上話を続けることができなくて、たいへん困ったことがあります。そういえば、先生は入学式や卒業式で敬天愛人については必ずお触れになっていますが、西郷隆盛については全くといっていいほど言及されなかったことが、先生のその一言で、私には納得させられたような思いがしました。」（敬愛短大図書館報63.8.1号）ということである。これはおそらく、個人崇拜や偶像化は、ややもすると権威主義的な雰囲気をかもし出したり、独善的な押しつけがまかり通ったりして、真実を謙虚に追求する態度とは相容れないものであると考えておられたためではあるまいか。

長戸路先生は本学園の建学精神「敬天愛人」を、教義、信仰ないし個人的信条としてではなく、自然と人間との関係にもとづく公理として、科学的に解明しようとされていたように思う。

先生の言葉をかりて、敬天愛人をもっとも簡単にいいあらわせば、「大自然と人間は、生みの親、生みの子関係にある。それゆえ、大自然の理法を畏敬し、その理法に随順して生きること、それがすなわち敬天である。そして、大自然の中に種（人類）として生み出され、公平平等に生かされている人間は、孤立しては絶対に生きてゆけない。ひとは互に愛しあい、相共に生きる以外に道はない、これが愛人である」ということになろう。そしてこのことは、人がこの地上に生み出された大自然の進化のあとを科学的に考察すれば、正常な思考力を持つ人間である限り、誰にも否定することのできない根本的な事実であるといわれている。

ここに見られるように、長戸路先生の場合、「天」とは天地宇宙の道理、大自然の理法を意味しており、「神」と同一視されてはいない。「愛」もま

た直接神につながる愛ではなくて、地上に共存していかなければならぬ人類のいわば相互愛である。

ところで、人間が自然によって生み出されたものであるという事実は、なるほど根源的な事実であるとはいえ、それは単なる自然現象にすぎないともいえる。いわば冷たい自然現象である。しかるにその自然が、人間の尊崇の対象となり、人間の道徳的当為の規範となるのはどうしてかという問題について、先生の考え方をさぐってみよう。

この問題についてたいへん参考になるのはティヤール・ド・シャルダンの思想である。シャルダンが先生が、「カントと共に生涯探求し続けてきた」といわれている学者であって、その学説を紹介された論文に次のような一節がある。「彼によれば、こうした科学的な諸現象や諸事実を、あくまでも忠実に、そしてあくまでも謙虚に追求していくと同時に、どこまでも忠実に、そしてまたどこまでも謙虚に、それらの総合を続けて行きさえすれば、真理への道は限りなく開け、ついにはその“divine author”にまで通じていくはずであるという科学者の確信に、彼の思想的特徴が存在している」。そして先生は、大自然の進化の過程をあくまでも科学的に追求して行けば、自然の進化は神の愛のわざ以外の何ものでもない、というところに行きつくという神学者シャルダンの思想を、「科学、神学、哲学の三領域にわたる巨大な総合」として高く称揚されている。

自然の進化の行く先について、先生は次のように述べておられる。「全宇宙が、あたかも生命あるものの如く、ある種の方角をとりながら進行していく。生物も無生物も、いや森羅万象が、天地宇宙が、相互に密接不可分に関連して、ある種の方角を目指して（ただし、これはわれわれ人間の感覚をもって感じとるには余りにも巨大すぎる）模索を重ねながら、動いていくものである」といっている。また、自然の進化と共に進化する人間の「窮極の境地」について、「それは理論的には、人間相互の間における、そして人間と自然（狭義）との間における完全な、いわば有機的一体をな

すともいふべき動的バランスに到達すること」,「人間は社会化の歩を進め,その究極において人類共同体の如きものを志向し」,「その生みの親である自然との絶えざる調和を求めつつ,同時に,他の人びととの間における収斂の度(愛の結集)を高め,完全な個人であるとともに完全な全体として自らを創りゆくべく,自然から運命づけられている存在である」。「われわれは,母なる天地宇宙(大自然)が,われわれ人間が歩むべく前提してくれている道を,文字通り模索しながら生きていくよりほか,生きるすべを知らない存在」である。それゆえ,「人類のおもむくべき道はおのずから明らかである。人間と自然との調和,人間関係における融和,この二つあるのみである。それらは,今日の人間にとって,ある意味ではSeinでありつつも,同時にSollenであるといわねばならない」とされている。

先生の論文の中には,もし私に見落としがなければ,神について述べた先生ご自身の言葉は見当たらない。シャルダンその他の学者から引用された文章中には,神についての叙述が数多くあるし,先生もけっしてそれを否定されてはいないようである。しかし自分の言葉で神について語るということはされなかったようである。ただ,「自然の心を心とし」,とか「天地宇宙,大自然の意図を謙虚に模索し」などという言葉を使っておられるだけである。思うに,先生は,合理的な自然観と人間観を基礎として,敬天愛人を「現代的に」説明しようとしたのであろう。そこにもある意味で,先生の謙虚さがうかがわれるように思うのである。

追記

本文中の引用については,いちいちその出所を明記しなかったが,参考にした長戸路先生の論文は次のとおりである。

千葉敬愛経済大学「研究論集」No. 1「巨大視野に立つ人間像」,同No. 13「カントの永久平和論」,同No. 15「私の信条」,同No. 17・18「自然,人間,教育」,同No. 19「教育ということの重大さをめぐって」

千葉敬愛短期大学「教職への模索」No. 3「模索ということ」,同No. 4「人生は模索の過程」,同No. 8「天と地と人と」等。